

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.244

2013年9月

名古屋大学オープンキャンパス2013を開催



目次

●ニュース

名古屋大学オープンキャンパス2013を開催	3
チュラロンコン大学及びハノイ工科大学との学術交流協定締結調印式を挙	4
親子サマーセミナー in 名古屋大学2013を開催	4
日本学術会議第3部夏季部会市民公開講演会を開催	5
平成25年度名古屋大学協定会総会・講演会を開催	5
第24回日本数学コンクール及び第17回日本ジュニア数学コンクールを開催	6
若手女性研究者サイエンスフォーラム・女子中高生理系進学推進セミナーを	6
開催	
名古屋スペースキャンプ2013 NSC-2を開催	7
「博士のキャリアパスシンポジウム」を開催	7

●知の先端

昆虫の隠された翅	8
新美 輝幸 (大学院生命農学研究科助教)	

●キャンパスクローズアップ

動物実験施設	10
--------	----

●知の未来へ

人の内面を外に引き出す視覚的インタラクションの分析と設計	12
平山 高嗣 (大学院情報科学研究科助教)	

●部局ニュース

サマースクール「アジアの法と社会2013」開催	13
テクノフロンティアセミナー TEFs2013を開催	13
ひらめき☆ときめきサイエンス「生物の『すごい!』を顕微鏡で	14
のぞいてみよう」を開催	
化学・生物実験講習会を開催	14
平成25年度工学部懇話会を開催	15
第1回農場講演会を開催	15
ICCAE 2013年度第2回オープンセミナーを開催	16
体験学習「年輪年代法の基礎実験」を開催	16
第18回1・2年次生への適応援助のための連絡会を開催	17
第92回防災アカデミーを開催	17
ミクロの探検隊を開催	18
第17回博物館特別展「くじら クジラ 鯨」を開催	18

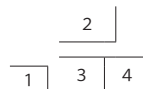
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成25年7月16日～8月15日	19
---------------------------------	----

●イベントカレンダー	21
------------	----

●ちょっと名大史	
豊田講堂完成式 ― 名大統一のシンボル誕生 ―	24

名古屋大学オープンキャンパス2013を開催





- 1 全体企画「大学の紹介」の様子
- 2 名大生相談ブースの様子
- 3 施設見学の様子
- 4 学部紹介の様子

名古屋大学オープンキャンパス2013が、8月7日(水)から9日(金)の3日間にわたり開催されました。これは、高等学校2年生を中心とした大学進学希望者を対象に、教育・研究における特色の紹介や施設見学等を通じて「名古屋大学で何が学べるか」を紹介し、今後の適切な進路選択をする上での意識を高めてもらうことを目的として、毎年行っているものです。連日の猛暑の中、多くの高校生が参加しました。

学部企画では、学部長をはじめ、教職員・在学生在が一体となり、趣向を凝らした学部説明、模擬講義、施設見学等が行われ、参加者は、教員や在在学生と直接懇談して、自分の進路等につい

て詳しく説明を聞き、熱心に質問やメモを取る姿が見られました。

また、全体企画では、教職員や在在学生による「大学の紹介」、「音のひとつときを!」、「学生生活あれこれ」、「女性研究者から見た名古屋大学」の講演等が行われたほか、生協学生委員による附属図書館、博物館、野依記念物質科学研究館、赤崎記念研究館、2008年ノーベル賞展示室等の公開施設の見学ツアーが実施され、さらには「名大生との対話コーナー」、「教科書・参考書の展示コーナー」等も設けられました。いずれの企画にもたいへん多くの参加者が訪れ、活気に満ちあふれていました。

今年度のオープンキャンパス参加者は、3日間を通じて8,760名でした。また、事前申し込みができなかった2,582名を含め、総勢で11,342名の方々がキャンパスを訪れました。

オープンキャンパス参加者数

8月7日(水)	教育学部	610名
	経済学部	775名
	工学部	1,926名
8月8日(木)	法学部	663名
	医学部(医)	640名
	農学部	763名
8月9日(金)	文学部	771名
	情報文化学部	262名
	理学部	1,503名
	医学部(保)	847名
合計		8,760名

*医学部保健学科のオープンキャンパスは大幸キャンパスで実施しています。



チュラロンコン大学及びハノイ工科大学との学術交流協定締結 調印式を挙

タイ チュラロンコン大学及びベトナム ハノイ工科大学との大学間学術交流協定締結調印式が、8月8日(木)、本学において挙行されました。本協定は、グリーンモビリティ連携研究センターの独立行政法人日本学術振興会 研究拠点形成事業（アジア・アフリカ学術基盤形成型）の採択を受け、「バイオ資源を活用したグリーンモビリティ材料研



調印式での記念撮影

究拠点」の形成を契機とし、関係分野も含めた幅広い研究交流を目指し、3校間で締結されたものです。

本学とチュラロンコン大学及びハノイ工科大学は、それぞれ1992年、2009年に個別に大学間学術交流協定を締結しており、これまでも学術交流を行ってきました。この度の研究拠点形成事業の下、環境への負荷が少なく、安全かつ安心な交通手段及びシステム（グリーンモビリティ）分野における革新的技術の創出や研究者育成を目指すとともに、発展的に広い分野で、3校間のより活発な研究交流が期待されます。

調印式で、渡辺理事は、本学のアジア戦略に触れ、チュラロンコン大学及びハノイ工科大学がアジアにおける重要なパートナーである旨に言及し、引き続きの協力を要請しました。また、ポーンポット・ピアムソブーン チュラロンコン大学副学長、ファン・ホアン・ルオン ハノイ工科大学副学長からは、本協定締結を契機とした研究交流に大いに期待する旨が述べられました。

調印式に先立ち、両副学長は、濱口総長への表敬訪問を行い、調印式後はナショナルコンポジットセンター及びグリーンモビリティ連携研究センターを見学しました。

親子サマーセミナー in 名古屋大学2013を開催

親子で取り組むサマーセミナー in 名古屋大学2013が、8月12日(月)、ES 総合館 ES ホールにおいて開催されました。このセミナーは、本学と日本経済新聞社との連携協定に基づく活動の一環として行われました。

渡辺理事の開講のあいさつの後、eco 実験パフォーマーらんま先生は、「親子で知的体験!! eco 実験パフォーマンス」

と題し、水の実験を通じて環境への配慮の重要性を紹介しました。作家の荒俣 宏氏は、「目からウロコ!! 歴史と“しるし”の物語」と題し、豊富な雑学を織り交ぜつつ歴史について説明しました。気象予報士でNHK ラジオ気象キャスターの伊藤みゆき氏は、「～天気のみかた～知って得する予報のヒミツ」と題し、気象や地球環境について講演しました。



講義を行うらんま先生



講義を行う伊藤みゆき氏

日本学術会議第3部夏季部会市民公開講演会を開催

日本学術会議第3部夏季部会市民公開講演会が、8月1日(木)、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて開催されました。

同講演会は、日本学術会議第3部夏季部会を本学で開催することに伴い、一般市民を対象として企画されたものです。



益川特別教授と懇談する高校生

当日は、猛暑の中、約120名の参加者が、研究の第一線で活躍している科学者の講演に耳を傾けました。

講演では、國吉康夫東京大学情報理工学系研究科教授が「ロボティクスによる人間知能の発生原理解明」と題して、知能は脳が創り出すわけではなく、環境と身体から発生すること、また、情報理工学系だけにとどまらず、関係する異分野の研究者とプロジェクトを組み、新たな研究手法によるアプローチが始まっていることなどの研究を紹介しました。

続いて、益川敏英本学特別教授による「現代社会と科学」と題した高校生との懇談が行われました。事前に申し込みをした高校生が、益川特別教授に対し、様々な質問をしました。学生時代の研究に関するエピソードや愛読書などについて、時にユーモアたっぷりに応え、参加者は興味津々に聞き入っていました。最後に、益川特別教授は質問をした高校生一人ひとりと握手を交わし、和やかな雰囲気の中、終了しました。

平成25年度名古屋大学協力会総会・講演会を開催

平成25年度名古屋大学協力会総会・講演会が、7月27日(土)、医学部附属病院中央診療棟3階講堂において開催されました。

総会では、名古屋大学協力会顧問の濱口総長から開会のあいさつがあり、続いて、同会会長の松尾副総長による議事進行のもとに、平成24年度事業報告・決算報告及び平成



会場の様子

25年度事業計画(案)・予算(案)が承認され、最後に、同会副会長の内山田竹志トヨタ自動車株式会社代表取締役会長より閉会のあいさつがありました。

講演会では、「再生可能エネルギー利用にむけて」をテーマとして、4件の講演がありました。まずは「再生可能エネルギー導入普及に向けたNEDOの技術開発」と題し、NEDOで実施している技術開発が紹介されました。次いで「再生可能エネルギーの導入拡大に向けた取り組み」と題し、中部電力グループの取り組み、国の不安定電源の普及策などが紹介されました。続いて「太陽エネルギー社会基盤材料・デバイスの開発」では、太陽熱を活用するための熱電変換材料・デバイスの開発動向(JST・CREST)で推進している高効率熱電変換材料・システム研究の成果が紹介されました。最後に「車載蓄電池を活用したエネルギーマネジメントシステム(EMS)」では、車載蓄電池を活用したモデル予測型の家庭用EMS(HEMS)とコミュニティ用EMS(CEMS)の設計に関する研究について紹介されました。

再生可能エネルギーに関する講演会は、時宜を得た企画で関心も高く、参加者は95名と盛況でした。

第24回日本数学コンクール及び第17回日本ジュニア数学コンクールを開催

第24回日本数学コンクール及び第17回日本ジュニア数学コンクールが、8月10日(土)、名古屋、大阪、三重、和歌山の4会場において開催されました。

同コンクールは、小学5年生から高校生を対象に、科学と技術の基盤を担う夢とロマンを秘めた若者の才能を発掘し、育成していくことを目的に開催しています。平成2年



問題に取り組む参加者

から「日本数学コンクール」を、同9年から「日本ジュニア数学コンクール」を行っており、平成22年度からは、大学企画として開催しています。

今年度は、日本数学コンクール問題として「6面体」、「累乗和のビジュアル解法」の2題、日本ジュニア数学コンクール問題として「ワケル博士」、「斜面の花畑」の2題、共通問題として「小石と天秤」、「手数が多いじゃんけん」の2題が出題され、小・中・高校生191名が、楽しみながら難しい数学の問題に取り組みました。

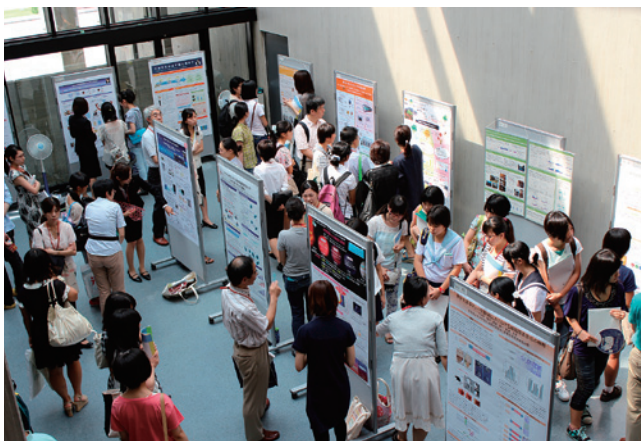
なお、問題はweb上に掲載しています。(http://www.sangaku.nagoya-u.ac.jp/math-con/)

審査員により論理性や着眼点などが審査され、11月9日(土)に表彰式が行われる予定です。

若手女性研究者サイエンスフォーラム・女子中高生理系進学推進セミナーを開催

若手女性研究者サイエンスフォーラム・女子中高生理系進学推進セミナーが、オープンキャンパス2013の開催中の、8月7日(水)、8日(木)の両日、豊田講堂ギャラリー及び第1会議室において開催されました。

8日(木)は、森田(寺尾)美代生命農学研究科教授及び張賀東情報科学研究科准教授の2名による特別講演があ



ポスターセッションの様子

り、続いて、中高生に対してポスター発表の聴き方や見方のポイントを伝えるポスターガイダンス、若手女性研究者32名によるポスターセッションが行われました。

セミナーには、愛知、岐阜、三重の東海3県を中心に、女子中・高校生とその保護者や教員などの来場があり、来場者たちもポスターセッションに参加しました。

最後に、ポスターセッションに対する投票が、中・高校生や発表者、理系部局の研究科長等を含む参加者全員で行われ、得票数により、大学院理学研究科の空華智子研究員、同研究科博士課程後期課程1年の伴場由美さん、環境医学研究所博士課程後期課程2年の田淵紗和子さん、大学院理学研究科博士課程前期課程1年の荒木未紗保さんの4名に藤井理事から総長賞が授与されました。

フォーラムは、若手女性研究者の研究発表・交流を目的とし、また、セミナーは、理系分野に興味のある中・高校生へのエンカレッジの場として、理系分野で活躍中の女性研究者の話を直接聴くことができる機会であり、ともに自然科学分野についての意識を深めるよい機会となっています。

名古屋スペースキャンプ2013 NSC-2を開催

名古屋スペースキャンプ2013 NSC-2が、7月28日(日)から31日(水)までの4日間開催されました。これは、本学と宇宙航空研究開発機構(JAXA)との連携協力協定に基づき、講義や演習及び施設見学を通じ、日本の宇宙開発についてさらに理解を深めてもらうことを目的に行われ、全国の応募者から選ばれた24名の小・中学生が参加しました。



豊田講堂前での発射実験の様子

参加者は、名古屋市科学館や三菱重工などの中部地区のロケット、宇宙機の研究開発現場の見学、モデルロケットの製作、発射実験などを行い、最前線の天文研究や宇宙開発を体験しました。

本学では29日(月)、大学院理学研究科宇宙物理学研究室において、金田英宏教授から赤外線・X線天文衛星プロジェクトや観測器についての説明を受け、赤外線望遠鏡の主鏡の実物などを見学し、松本浩典准教授からX線望遠鏡の解説を受けました。また、大学院工学研究科航空宇宙工学専攻では、山田克彦教授と長野方星准教授、横田茂助教から、人工衛星の姿勢制御や熱制御、深宇宙探査機の推進器の研究について紹介がありました。30日(火)の夕方には、豊田講堂前広場でモデルロケットの打上げをしました。参加者はロケットの飛び方を見て、一喜一憂しながら実験を行い、國枝理事が「失敗をすることも研究の中では大事」と声をかけていました。

最終日には、スペースキャンプで印象に残ったこと、将来の夢や希望について報告し、大学の研究について知ってもらえる良い機会になりました。

「博士のキャリアパスシンポジウム」を開催

「博士のキャリアパスシンポジウム」が、7月18日(木)、野依記念学術交流館において開催されました。このイベントは、社会貢献人材育成本部ビジネス人材育成センターの企画で行われました。

当日は、濱口総長の開会のあいさつにはじまり、松尾泰樹文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課長より来賓あ



基調講演での質疑応答の様子

いさつと博士に関係する施策等について講演がありました。次に基調講演として、内閣府規制改革会議委員である森下竜一大阪大学医学系研究科教授より「アベノミクスにおけるメディカル・イノベーション」と題して、大学・産業界・国など多様な立場の経験をもとに博士人材に有用な情報やアドバイスを含む話、さらに、「多様なキャリアを歩んだ先輩たちからのメッセージ」として、ノボザイムズジャパン(株)福永健三氏、(株)デンソー半導体先行開発部蓑谷顕一氏、(株)ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング伊藤俊成氏、渡邊真由美リサーチ・アドミニストレーション室研究員の4名から博士学位を取得し新たなキャリアを選択した過程や現職の話や後輩たちへのエール、武田ビジネス人材育成センター長からは、博士のキャリア支援体制について話がありました。最後に、松尾副総長が総括し、閉会のあいさつとしました。100名以上の参加者が、最初から最後まで熱心に講演を聞き、講師に質問をしている姿が印象的でした。

博士が、大学院やポストドク時代にはどのような経験をして、それを社会でどのように活かしていくべきかを考える良い機会となりました。

昆虫の隠された翅

新美 輝幸 大学院生命農学研究科助教

昆虫をはじめとする節足動物の体は、“体節”とよばれる繰り返し構造から構成されています。進化の過程でそれぞれの体節はいろいろな形に変化して多様な形態をもつ生物が進化してきました。昆虫の翅も体節の一部が変化して獲得されたものですが、その起源は謎のままです。現存する昆虫には、胸部の2つの体節（中胸と後胸）にだけ2対の4枚の翅が存在します。しかし、約3億年前の昆虫には、もっと多くの体節に原始的な翅が存在していたことが知られています。これまでは、進化の過程で飛翔用に4枚の翅だけが残り、それ以外の原始的な翅は失われたものと考えられてきました。では、胸部および腹部の各体節において獲得されたと考えられる原始的な翅が、どのように中胸と後胸の2対のみに限定され翅として進化したのでしょうか？そこで、私たちは昆虫翅の進化に関する従来の仮説を分子レベルで詳細に検証することにしました。

これまでの研究により、中胸と後胸以外の体節で翅が失われたのは、各体節の特徴付けを行う *Hox* 遺伝子群が翅形成を抑制するようになったことが原因であると考えられてきました（図1）。この仮説は、*Hox* 遺伝子の機能を阻害することにより、本来は翅の存在しない前胸や腹部にも翅が形成されることから支持されてきました。私たちは、形態の観察に適したチャイロコメノゴミムシダマシ（図2）という甲虫を研究材料

に用い、*Hox* 遺伝子の機能が阻害された際に形成される翅は、本来翅ではない“どの構造”に由来するのかという点に着目しました。*Hox* 遺伝子の機能を阻害した個体を用いて詳細に形態観察を行った結果、前胸では体を物理的に保護する構造（前胸保護構造、hypomeron）が、腹部では蛹期に天敵への反撃を行うための突出構造（腹部突出構造、denticular outgrowth）が、翅に変化することを突き止めました（図3）。次に、翅とこれらの構造との相同性を明らかにするため、翅形成のマスター遺伝子である *vestigial* (*vg*) について解析しました。その結果、翅を作るのに必要不可欠な *vg* 遺伝子は、翅の形成過程だけでなく、前胸保護構造や腹部突出構造の形成過程でも翅と同様の発現パターンを示すことが明らかになりました。つづいて、*vg* 遺伝子の機能を阻害したところ、翅が形成されなくなっただけでなく、驚くべきことに前胸保護構造と腹部突出構造も形成されませんでした（図4）。つまり、翅形成のマスター遺伝子は、これらの構造をつくるためにも必要不可欠であることが初めて明らかになりました。翅とは全く異なる形態、役割をもった構造が、実は翅と同じような遺伝子の働きによって形成されることがわかったのです。本研究により、前胸保護構造や腹部突出構造は、翅と相同な構造体であると結論付けることができました [1]。この発見は、“原始昆虫に存在した多くの翅は進化の過程で失

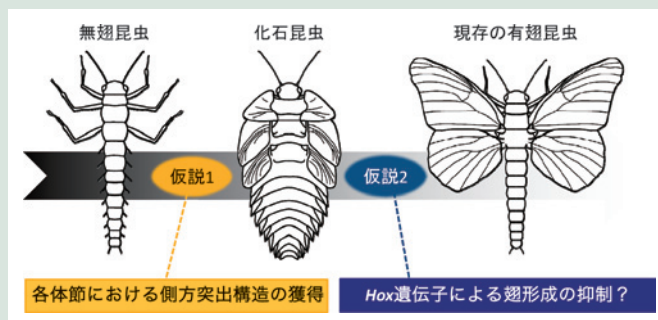


図1 昆虫翅の進化の仮説
 少ない化石証拠からこれまで考えられている昆虫翅の進化のシナリオを模式的に示した。(仮説1)まず、胸部および腹部の全体節において翅様の側方突出構造が獲得された。(仮説2)その後、胸部の2体節のみで飛翔機能を有する翅へと進化し、それ以外の体節では翅形成が抑制されたと考えられている。本研究では、仮説2の検証を行った。(Carroll et al. (2005) *From DNA to diversity 2nd edition*. Figure 5.11より改変)



図2 チャイロコメノゴミムシダマシ (*Tenebrio molitor*)
 貯穀害虫の一種。成虫の体長は約1.4 cm。幼虫はミールワームとしてペットのエサとして販売されている。左から、幼虫、蛹、成虫。

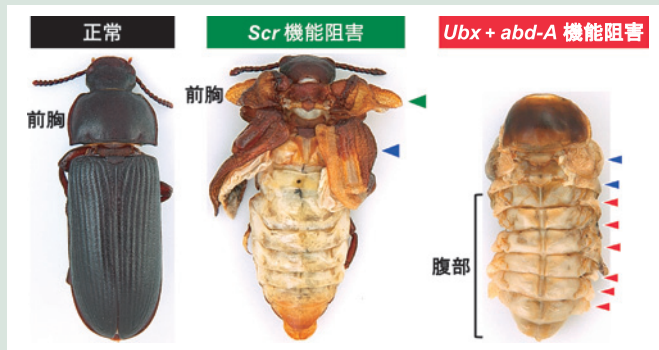


図3 Hox 遺伝子の抑制により前胸と腹部に形成された翅
 (左) 正常な成虫。(中) 前胸の特徴付けを行う Hox 遺伝子である *Sex combs reduced* (*Scr*) の機能を阻害すると前胸に翅が形成される (緑矢頭)。(右) 後胸と腹部の特徴付けを行う Hox 遺伝子である *Ultrabithorax* (*Ubx*) および腹部の特徴付けを行う Hox 遺伝子である *abdominal-A* (*abd-A*) の機能を同時に阻害すると腹部に翅が形成される (赤矢頭)。青矢頭、本来の翅。

われ、4枚の翅だけが残った”とするこれまでの定説を覆すものであり、昆虫の原始的な翅はただ

失われただけでなく、いろいろな形態に変化してきたことが明らかになりました。昆虫の種数は現在知られている動物種の約7割を占めており、最も地球上で繁栄した動物といえます。それだけいろいろな形態の昆虫が存在するという事です。本研究により、昆虫がいろいろな形態を生み出す新しい仕組みとして、“隠された翅”が利用されていることが明らかとなりました。今後、他の昆虫でも“隠された翅”が見つかることにより、多様性に富んだ昆虫の進化機構の理解が進むことが期待されます。

[1] Ohde, T., Yaginuma, T. and Niimi, T. (2013) Insect morphological diversification through the modification of wing serial homologs. *Science*, **340**, 495–498.

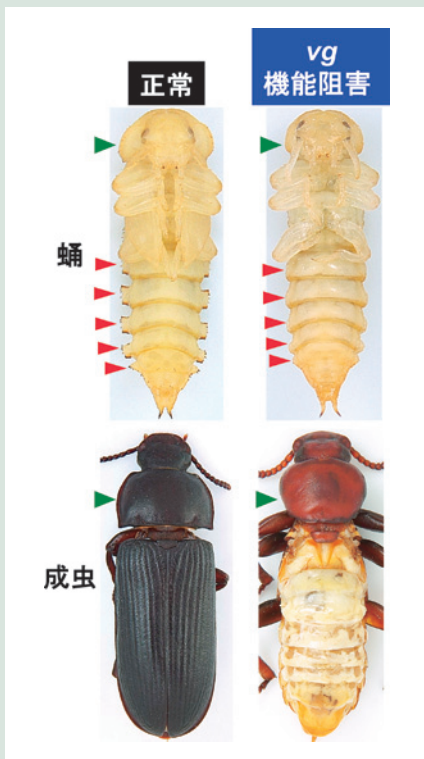


図4 翅形成マスター遺伝子 *vestigial* の機能阻害
vg 遺伝子の機能阻害により、翅だけでなく、蛹のみに存在する腹部突出構造 (赤矢頭) と前胸保護構造 (緑矢頭) は消失する。

1989年名古屋大学農学部農学科卒業、1993年名古屋大学大学院農学研究科博士課程 (後期課程) 修了、博士 (農学)、同年日本学術振興会特別研究員 PD (名古屋大学)、1995年日本学術振興会海外特別研究員 (パーゼル大学) を経て1997年より現職。2001年～2005年科学技術振興機構さきさきけ研究研究者。
 抱負：誰もまねのできない面白い研究を目指す。
 趣味：自転車での史跡巡り、日本100名城スタンプの収集、生き物の飼育など。

にいみ てるゆき



42. 動物実験施設



1	5	6
2		
3	4	7

- 1 外観（東面）
- 2 飼育室
- 3 洗浄室
- 4 実験室
- 5 ダーティ廊下
- 6 クリーン廊下
- 7 会議室

本学東山キャンパスでは、環境医学研究所をはじめとする8部局で遺伝子改変マウス、モデル動物などを使った実験・研究を推進していますが、環境医学研究所で現在管理している東山キャンパス唯一のSPF動物実験施設は、建設後46年が経過し老朽化・狭隘化が著しく、遺伝子改変実験動物、モデル動物の飼育を満足なSPF環境で行うことが困難となってきました。現有施設での飼育動物は大幅に不足する状況であり、やむを得ず各部局の建物等での飼育を行って対応していましたが、飼育・管理環境が悪いため、実験・研究データの結果にバラツキが出て支障をきたしていました。



そこでこのたび動物飼育管理の効率化・集中化による安全で適正な動物実験環境を構築し、最先端研究のための基盤を整備する目的で、最大約1





万匹の SPF 動物を同時に飼育できる環境の整った動物実験施設を新たに整備しました。

建物は環境医学研究所北館の北側に計画し、平成24年5月から工事着手、約9か月を経て平成25年2月末に完成しました。計画地の周辺には農学部温室・圃場等があり、建物の位置や高さ等については、日影や夜間の室内照明等の植物への影響を考慮した計画としています。建物は、鉄筋コンクリート造地上3階、延べ面積2,219m²、外部の仕上げや色調は隣接する環境医学研究所に合わせています。また、動物飼育室などは良好な飼育環境を維持するため24時間空調を行うことから省エネにも十分配慮し、外部サッシの複層ガラスをはじめ、建物全体の断熱性能の向上を図っています。

建物1階には、管理室・教員室・飼育室・実験室・動物受入れ室・洗浄室、2階には会議室・飼

育室・実験室、3階には機械室・ボイラー室、発電機室があります。正面玄関、管理区域内の出入り口は指紋認証によるセキュリティチェックを行い、室内の廊下等には監視カメラを設け施設内の管理をしています。

施設のメインとなる SPF 動物飼育室周辺の平面プランについては、管理エリアをクリーンエリアとダーティエリアに明確に区分しています。利用者の出入りをクリーンからダーティへのワンウェイ動線とすることにより、動線が重ならずクリーンな動物飼育環境の維持が可能となります。

電気設備としては、非常用発電機設備を導入し停電時も動物の飼育環境を損なうことのないようにしています。照明器具はできる限り消費電力の少ない LED 照明の利用やセンサーによる不在時消灯によりランニングコストの軽減を図っています。また、温湿度コントロールをエリア単位で設定できるようにし、通年24時間空調システムにより、各種動物に適した飼育環境となるように計画しています。

今回の動物実験施設の整備により、世界の中核的な研究拠点として安全で適正な動物実験環境が確保され、動物実験の安全性、実験・研究データの信頼性が飛躍的に向上し、より質の高い学術成果を得られることが期待されます。

(施設管理部)



平山 高嗣
大学院情報科学研究科助教

人の内面を外に引き出す視覚的インタラクションの分析と設計

人と「あうん」の呼吸で協調的に活動することができるシステム設計に取り組んでいます。そのためには、システムが人の興味、意図、理解度、個性、能力といった内部的な状態を推定することが重要になりますが、それは外部から受動的に観察するだけでは困難なことです。

人同士のコミュニケーションを分析したところ、積極的に働きかけることで、対話相手の振る舞いに心の状態を反映した反応が顕われることが明らかになりました。例えば、視線投げかけを伴う働きかけに対する不同意の発話応答タイミングが同意の場合より遅くなり、それらのタイミングの差が視線投げかけを伴わない場合より大きくなります。

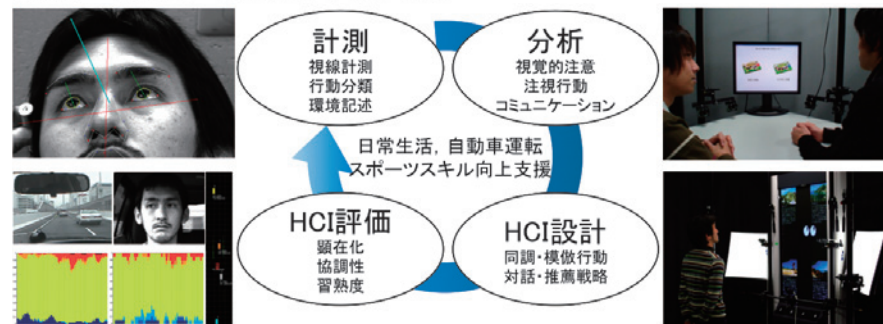
この知見を応用し、システムが視覚情報の提示によってユーザに働きかけ、それに対する視線反応のダイナミクスから、提示情報に対する興味の度合いを推定する視覚的インタラクション Mind Probing を提案しました。また、それを Human Agent Interaction の枠組みに応用し、興味を探る行為としての共同注視を模した注視模倣インタラクションを設計し、視野にある複数の対象に対するユーザの潜在的な興味を注視行動に引き出すことに成功しました。

近年は、対話状況以外の日常活動シーンにおいて Mind Probing が成り立つ状況を探っています。人の生活空間には動的な視覚刺激が溢れています。その中から人の内面を反映した視線反応を引き起こすものを抽出できれば、それは Mind Probing のためのトリガとみなすことができます。

そこで、種々に人の状態を統制した状況下で外的環境変化と注視行動との関係の分析を進めています。例えば、映像視聴時の集中／非集中状態において、映像変化と視線運動との時空間の相関性を分析し、映像内の誘目性が高い領域の並進移動が集中視聴時には追従性眼球運動を確かに引き起こすことを明らかにしました。自動車運転時の集中／非集中状態においては、周辺車状況変化と注視行動との時間関係の分析を行い、追い越し車に対する注視反応のタイミングが非集中時に比べて集中時で有意に早くなることを明らかにしました。また、興味や集中に比べて定常的な内面の状態にも注目し、観察している事対象に対して習熟したスキルを持つ人は、未熟な人に比べて適度に視線を分散させ、効率が良い注視行動を行っていることを明らかにしました。

長い道のりかもしれませんが、このような分析を積み重ね、人の心の状態を引き出す刺激がどういったものであるか特定できれば、人の活動をサポートする環境設計にも役立てることができると考えています。

人間の目は環境から情報を取得し、かつ心の状態を反映した振る舞いを示すインターフェースです。環境、視覚、心との関係を情報学的アプローチで解明し、それを応用したヒューマンコンピュータインタラクション (HCI) システムを設計・開発し、評価を行っています。



サマースクール「アジアの法と社会2013」開催

●大学院法学研究科、法政国際教育協力研究センター

大学院法学研究科及び法政国際教育協力研究センターは、8月7日(水)から9日(金)までの3日間、文系総合館7階カンファレンスホールにおいて、サマースクール「アジアの法と社会2013」を開催しました。これは、法務省法務総合研究所、公益財団法人国際民商事法センター、慶應義塾大学大学院法務研究科、神戸大学大学院国際協力研究



講義を受ける参加者の様子

科、早稲田大学法学学術院・比較法研究所等との共催で、国際協力機構（JICA）及び日本弁護士連合会の後援によるもので、次世代のアジア諸国法研究者や法整備支援の担い手を育成することを目的に、平成21年より毎年開催されています。5回目の開催となる今年は、法学部生、大学院生、法科大学院生、社会人を含む50名以上の参加者が、日本全国から集まりました。

鮎京理事によるアジアの法を学ぶ意義と方法についての基調講演をはじめ、アジア諸国への法整備支援に携わっている研究者や法律実務家を多数招へいし、研究方法論と研究史、法整備支援をめぐる理論動向、法律実務家がアジア法整備支援に関わることの意義、法整備支援に関わるためのキャリアパスについてオムニバス形式で講義が行われました。

参加者からは、日本がアジア諸国へ法整備支援を行う意義やその携わり方について具体的な質問がされたり、11月に開催される法整備支援に関する学生シンポジウムに向けて、参加者主導の積極的な議論が展開されました。このサマースクールは、同じ志を持つ若者たちが出会い、ネットワークを構築する場としても活用されており、参加者は懇親会やバーベキューを通じて友情を深めました。

テクノフロンティアセミナー TEFS2013を開催

●工学部

工学部では、8月2日(金)、同学部電気電子・情報工学科の各学生実験室等において、テクノフロンティアセミナー TEFS (Techno-Frontier Seminar) 2013「触れてみよう、電子と情報の最先端に」を開催しました。

同セミナーは、電気電子・情報分野の最先端の研究を直接体験し工学の面白さを理解してもらうことにより、近年



実験課題に取り組む参加高校生

の若年層の理工系離れを少しでも解消することを目的に、KDDI 財団の援助のもと、電気電子・情報工学科教員有志によって、平成7年度より毎年この時期に高校生を対象に開催しています。19回目となる今年は、東海地方を中心に24の高等学校・高等専門学校から42名の参加がありました。

参加者は、「電子ブロックで体験する物理と研究最前線」、「エコロジーな発電装置を作ろう!」、「大気圧放電プラズマでオゾンが発生させよう!」、「ロボットのしくみを理解する」、「リモコンカーを作る」、「人間と競う人工知能を作ろう!」の6つの実験課題の中から各自が選んだ課題について、同学科の教員や大学院生のアドバイスのもと、試行錯誤を繰り返しながら、熱心に製作や実験に取り組みました。また、今年度は各実験課題の前に、大学の設備でなければなかなか体験できない超電導や雷放電の実験装置の見学を行いました。

参加者は、教員や大学院生との交流や大学施設の利用を通じ、大学生活を実感する充実した一日を過ごせたようでした。このセミナーを通じて、高校生が電気電子・情報分野により興味を持ってもらえることを期待しています。

ひらめき☆ときめきサイエンス「生物の『すごい!』を顕微鏡でのぞいてみよう」を開催

●グリーンモビリティ連携研究センター

グリーンモビリティ連携研究センターは、8月2日(金)、齋藤永宏同センター教授研究室において、ひらめきときめきサイエンス「生物の『すごい!』を顕微鏡でのぞいてみようー水がコロコロころがる表面ー」を開催しました。同プログラムには、小学4～6年生を中心に18名が参加し、ハスの葉の上を水がコロコロと転がる仕組みを体験



参加者の様子

や観察を通して学びました。

初めに、学内で生息している植物の中で水をはじく葉がないかを、子どもたちと探索しました。子どもたちは夢中で学内の色々な葉に水をかけ、水のはじき方、表面の触感の違いを鋭く比較していました。水をはじく葉を見つけたら、それらを採取し、電子顕微鏡での観察に挑戦しました。日頃は見ることのできないマイクロな世界への冒険に、驚きとワクワク感で彩られた目の輝きを垣間見せていました。小学生たちは、電子顕微鏡での観察を通し、水をはじく葉の表面には、目に見えない凹凸があり、さらに、それが葉によって様でないことを知ることができました。

最後に、今回体験した生物の「すごい!」をまとめて、発表会を行いました。「今日は葉にいろんな凹凸を見つけました!水がコロコロ転がる秘密です。」と発表した小学生たちに、次世代の研究者の将来を見つけることができました。

化学・生物実験講習会を開催

●工学部

工学部は、8月6日(火)、同学部化学・生物工学科の各実験室等において、化学・生物実験講習会を開催しました。

この講習会は、高校生を対象に、応用化学、生物機能工学、分子化学工学の学問と研究について、実験を通じて教員や大学院生と交流する中で、大学で化学を学ぶことの面白さを体感してもらうことを目的に、毎年この時期に開催



説明を聞く高校生

しているものです。今年度は、応募者が定員を大幅に超えたため、抽選により選ばれた26校から72名の高校生が参加しました。

参加者は「ブロックポリマーフォトンクス～高分子膜を光らせよう!～」、「カフェインの抽出～眠気覚ましに一番～」、「金属イオンを分けてみよう、花火の色を見てみよう」など12の実験課題の中から、自ら選択したテーマについて、午前と午後各1回ずつ2つの実験に取り組みました。

教員や大学院生の指導のもと、物質の色や光の変化を観察したり、ポリマーに触ったり、化学反応の進む様子を専門機器で分析したりして、参加者自らが体験する中で、大学で学ぶ化学に対する興味が深まったようでした。

平成25年度工学部懇話会を開催

●工学部

工学部は、8月7日(水)、ES総合館3階大会議室において、平成25年度工学部懇話会を開催しました。同懇話会は、高校の進路指導担当教諭を対象に、理系への進学を考える高校生に学部選択の判断材料を提供することを目的として、毎年この時期に開催しているもので、今回は「名大工学部の求める学生像」をテーマとし、愛知、岐阜、三重



少人数グループでの意見交換

の東海3県下を中心に1府5県の32の高校から36名の教諭が参加しました。

松下工学部長からあいさつと工学部の説明があった後、長谷川工学研究科副研究科長から「名大工学部及び工学研究科の教育・研究と求める学生像」、中野正樹同学部教授から「名大工学部の求める学生像：入試制度から」、大学院工学研究科博士課程前期課程1年の浅井 崇さん、近藤智文さんからそれぞれ「私の大学生活」、「名大工学部のキャンパスライフ」と題した講演が行われました。

講演に続いて、質疑応答及び意見交換が行われ、工学部の研究内容、入試及び就職状況について、高校教諭と同学部教員との忌憚のない意見交換が行われました。今年度は少人数のグループに分かれて意見交換を行ったところ、これまで以上に距離の近い意見交換ができたことと好評を博しました。

その後、高校教諭は13の班に分かれて各研究室の見学を行い、教員や大学院生から、現在進めている研究内容が分かりやすく紹介されました。大学院生との対話を通じて、学生が成長する様子に直接に接することにより、同学部における教育・研究活動の魅力伝えるよい機会となりました。

第1回農場講演会を開催

●大学院生命農学研究科

大学院生命農学研究科附属フィールド科学教育センター東郷フィールドは、7月29日(月)、東郷町役場大会議室において、第1回農場講演会を開催しました。東郷フィールドでは、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」の一環として、平成14年度から毎年、一般市民に大学の研究を身近なものとして伝える「農場講演会」を



講演会の様子

企画・実施しています。平成20年度からは、同フィールドが位置する東郷町の後援を受け、講演会の一部を町の施設で開催しています。

東郷町では、農業の学習と体験を通して、多様な農業者の育成を進め、農業の活性化を図ることを目的として「とうごう農学校」を開設しています。今回は、主にその受講者を対象として、森 仁志生命農学研究科教授が「植物ホルモンは農業にどう役立っているのか」と題し、植物の育成に必須な植物ホルモンが農業現場でも広く利用されていることを、具体例をあげて紹介しました。講演では、植物ホルモンの種類とそれぞれの植物ホルモンの植物育成における役割について解説するとともに、植物ホルモンやその作用を抑制する成長調節剤が、作物の育成の促進や抑制、種なしブドウの生産、輸入バナナの追熟、もやし生産、トマトやナスの果実生産、花を長持ちさせる切り花処理など様々な場面で利用されていることを紹介しました。

「とうごう農学校」の受講者27名に加え、一般の方からも20名ほどの参加がありました。講演後には熱心な質疑が交わされ、盛況な講演会となりました。

ICCAE 2013年度第2回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、7月29日（月）、農学部第7講義室において、2013年度第2回オープンセミナーを開催しました。

サハラ砂漠以南のサブサハラ・アフリカの国々では、コメの消費が急激に拡大してきていて生産が追いつかない状況です。日本が支援するケニア、ウガンダ、ガーナ、セネ



参加者の質問に答える福田プロジェクトリーダー

ガル、マダガスカル等23カ国は、コメの生産向上に向けて国を挙げて努力していますが、まだまだ追いついていません。一方、栽培の増加に伴い病害虫が発生し、特にいもち病は大きな問題になるのが常で、ケニアで発生して、被害が甚大になった例があります。この病害は、農業による防除が一般的ですが、途上国では様々な事情によって農薬が効果的に使えない現状のため、抵抗性品種の育成は何よりも重要な対策となります。

同センターは、福田善通国際農林水産業研究センタープロジェクトリーダーと共同でアフリカのこの問題に取り組んでいます。

同セミナーでは、ケニアの調査事例をもとに、イネいもち病害に対する安定的な防除体系の開発に向けた課題について議論しました。圃場抵抗性を基準とした抵抗性遺伝子集積による品種育種の戦略など、参加した約20名の教員、大学院生、愛知県のイネ育種研究者の間で、熱い議論が交わされました。

体験学習「年輪年代法の基礎実験」を開催

●年代測定総合研究センター

年代測定総合研究センターは、7月31日（水）、8月1日（木）の2日間、体験学習「年輪年代法の基礎実験」を開催しました。

同センターは、加速器質量分析による放射性炭素（ ^{14}C ）年代測定を行い、学内外の共同教育研究に貢献しており、定常的に ^{14}C 年代測定の精度及び確度の検定を、暦年代が

既知の樹木年輪を用いて行っています。また、太陽地球環境研究所との共同研究として、樹木年輪の ^{14}C 濃度を精密に測定し、過去の太陽活動の変遷を明らかにしています。今回は、これらの研究の基礎となる年輪年代法について、小・中学生でも理解できるように工夫した体験学習を実施しました。

体験学習では、参加者は、一人ひとりに1個の木材を与えられ、木材の切断、年輪観察面の研磨、年輪幅の計測と記録、年輪幅変動図の作成、そして変動図と標準年輪幅変動パターンとの総合合わせから年輪年代を決定するまでの工程を体験しました。

この他に、キャンパス内に生育する樹木の観察、 ^{14}C 測定用の加速器質量分析装置の見学、また、研究紹介として、年輪年代法を用いた年代測定、樹木年輪の ^{14}C 濃度の経年変化を用いた太陽活動履歴の解明、珪化木の年輪による大昔の環境の推定などに関する講演があり、参加者から質問が多数寄せられました。10名の小・中学生と2名の保護者が実習に積極的に取り組み、年輪年代法への理解を深めました。



年輪試料の採取の様子

第18回1・2年次生への適応援助のための連絡会を開催

●学生相談総合センター

学生相談総合センターは、7月22日(月)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第18回1・2年次生への適応援助のための連絡会「ひきこもる学生－名古屋大学の現状について－」を開催しました。この連絡会は、各学部における1・2年次生の指導教員等が、同センターと連携しながら学生への指導・援助を進められるよう、毎年テーマを定



連絡会の様子

めて平成8年度から開催しており、学生相談総合センターからの学生の現状報告や講演等を踏まえ、同センターと参加者との情報交換等を行うことにより、情報共有や学内におけるネットワークの構築を図ることも目的としています。

まず、植田学生相談総合センター長のあいさつの後、約40名の参加者に対して山内星子同センター学生相談部門特任助教から、新入生アンケート及び取得単位が極端に少ない学生の実態についての報告があり、引き続き、古橋忠晃メンタルヘルス部門助教から、本学におけるひきこもり学生の特徴や事例、ひきこもりが増えた背景、さらにはひきこもる学生を立ち直らせるための手法の一例についての講演がありました。また、鈴木健一学生相談部門准教授及び船津静代就職相談部門助教から、それぞれの部門から見たひきこもり学生の実態やその対応方法等についての報告がありました。

引き続き行われた全体討論等においては、参加者から各報告等の内容を踏まえて、日常において感じている学生達の現状等について発言があり、その対応等についての意見交換が活発に行われました。

第92回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、7月19日(金)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第92回防災アカデミーを開催しました。今回は、日本気象協会参与である新井伸夫氏による「聞こえない音を聴く－気圧を測ると津波もわかる?－」と題した講演が行われ、96名の参加がありました。

新井氏は、初めに、東日本大震災の津波が発生させた気



講演する新井氏

圧変動が、沿岸から50km離れた内陸の岩手県水沢市に設置された気圧計で観測された事例をもとに、津波警報をより早く正確に発表するための精密気圧観測データの活用について紹介しました。また、こうした気圧観測の背景として、CTBT(包括的核実験禁止条約)による世界規模の観測ネットワークの整備と、気圧観測機器の仕組みに関する紹介があり、桜島の爆発噴火や、今年、ロシア隕石によって起こされた気圧変動の記録を事例に、データの実例とその読み解き方について説明がありました。最後に、精密気圧観測のネットワークと観測体制の構築について展望が示されました。

会場からは、講演内容を踏まえ、気圧変動を用いた津波警報の有効性について活発に質問がありました。

ミクロの探検隊を開催

●博物館

博物館は、7月22日(月)、同館展示室、同館実験室、野外観察園において、ミクロの探検隊「名古屋大学のムシを電子顕微鏡で観察しよう」を開催しました。抽選で選ばれた小・中学生18名が参加しました。

初めに、同館実験室で、ビーティングネットと呼ばれる危険なムシや竹で四隅を固定した白い布を使ったムシの採



ビーティングネットを使ってムシを採取する様子

取方法を学習しました。

続いて、野外観察園でムシの採集をしました。最初は怖々行っていた参加者も、だんだん慣れてくると、ビーティングネットに落ちたムシを上手にビンに移せるようになりました。

その後、同館実験室に戻り、顕微鏡での観察、電子顕微鏡の試料作りや、実際に電子顕微鏡を使っての観察、撮影を行い、どの参加者たちも、画面に映し出される拡大されたムシの姿に夢中になりました。さらに、生物には形と働きが結びつくことの説明を受けました。

参加者は、実際に体験することの楽しさ、面白さと科学が結びついた夏休みの一日になったと思われま

第17回博物館特別展「くじら クジラ 鯨」を開催

●博物館

博物館は、3月25日(月)から7月20日(土)までの間、第17回博物館特別展「くじら クジラ 鯨」を開催しました。

平成21年5月の終わり頃、名古屋港に流れ着いた1頭のマッコウクジラの死体を教育や研究に活用するため、博物館では約4年間かけて骨格標本作製しました。また、博物館には昨年、ツチクジラの全身骨格標本の寄贈もあり、



館内の様子

この展示会では、これら2体の骨格標本を中心に3つのコーナーを設けてクジラに関わるさまざまな資料を展示しました。

まず「クジラ骨格標本ができるまで」のコーナーでは、マッコウクジラが漂着してから骨格標本ができるまでの過程を、写真と映像で紹介しました。大長刀のような包丁を使ってクジラを解体する様子の写真を見て、思わず「うわー」と声をあげる人もいました。「クジラのからだのひみつ」のコーナーでは、「クジラの鼻の孔はどこにある?」、「クジラの後ろ脚は?」など、骨からわかるクジラのからだについて紹介しました。そして「日本でのクジラ利用の歴史」のコーナーでは、縄文時代や古代から近世のクジラ骨製の製品を展示し、和歌山県太地町で江戸時代に使われたくじら船の模型やクジラ解体用の包丁類などで江戸時代の捕鯨の様子を紹介しました。

なお、この特別展の関連企画として、2回の講演会や、くじらのひげで靴べらを作るワークショップのほかに、初めての試みとして落語会「名大博物館で落語を聴こう!」も開催し、87日間の会期中には11,388名の方が見学に訪れました。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年7月16日～8月15日]

記事	月日	新聞等名
1 野外観察園「初夏の植物」開催：1日～31日	7.16 (火)	中日 (朝刊)
2 平成25年度第2回地球教室－親子対象フィールドセミナー－河原で宝石と歴史を見つけよう！開催：8月31日、9月1日	7.16 (火) 7.25 (木)	中日 (朝刊) 読売
3 公益財団法人東洋医学研究財団助成先：田口 徹環境医学研究所助教	7.17 (水)	中日 (朝刊)
4 田所敬一環境学研究科准教授などは南海トラフ巨大地震に備え海岩板境界付近の海底に GPS を利用した観測装置を設置	7.18 (木)	中日 (朝刊)
5 渡辺理事と荘司長三理学研究科准教授などのグループは酵素の誤作動を利用して発癌性物質ベンゼンを一段階でフェノールに変換するバイオ触媒を開発	7.18 (木)	化学工業日報
6 第3回グローバル人材のための国際情勢レクチャーズ「グローバル人材のための国際情勢講座」開催：9日	7.18 (木)	中日 (朝刊)
7 未来のために③投票のすすめ：中京大学教授奥野信宏氏本学元副総長	7.18 (木)	毎日 (夕刊)
8 小澤正直情報科学研究科教授と東北大学の研究グループは同教授が提唱した「小澤の不等式」が光を用いた検証実験でも成立していることを証明	7.18 (木) 8. 8 (木)	中日 (朝刊) 他3社 朝日 (朝刊)
9 鈴木亜由子さん経済学部4年生はユニバーシアード競技大会の陸上女子1万メートルでの優勝後のインタビューで「卒業後は、陸上でさらに上を目指したい」と語る	7.19 (金)	中日 (朝刊)
10 講演会 諭吉「天賦人權論」開催：安川寿之輔本学名誉教授が講演	7.19 (金)	中日 (朝刊)
11 講演会「発達障害だって大丈夫－自閉症の子を育てる幸せー」開催：18日 椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生が「やならなかったことをほめるような子育てが大切」と語る	7.19 (金)	朝日 (朝刊)
12 浅井真人医学系研究科特任講師は新たなマウス肥満抑制遺伝子 MRAP2 を発見	7.19 (金) 7.21 (日)	中日 (朝刊) 他2社 毎日 (朝刊)
13 五島剛太理学研究科教授と釜崎とも子同研究員などのグループは染色体を2つに分けるタンパク質である微小管の集まりを立体的に画像化することに成功	7.20 (土)	中日 (朝刊)
14 京都大学研究員田邊剛士氏本学卒業生がヒトの体の細胞が iPS 細胞に変化する仕組みの一端を解明	7.20 (土)	中日 (夕刊)
15 産業への貢献 さらに前進 名古屋大学 松尾清一医学系研究科教授と石川隆司工学研究科教授の話	7.22 (月)	化学工業日報
16 研究現場発：ローテック融合でハイテク凌駕の創エネ技術開発 出口清一工学研究科講師	7.22 (月)	中部経済新聞
17 石原一彰工学研究科教授はヨウ素触媒を硬かった構造から柔らかくしなやかな構造に変えることで触媒の性能を高めることに成功	7.23 (火)	中日 (朝刊)
18 MF-Tokyo2013 プレス・板金・フォーミング展開催：24日～27日 石川孝司工学研究科教授が講演	7.23 (火)	日刊工業
19 窪田由紀教育発達科学研究科教授が名古屋市内の中学校で男子生徒が転落死した問題の検証委員会のメンバーに選出される	7.23 (火) 7.24 (水)	中日 (夕刊) 読売
20 日本化学会第94春季年会開催：2014年3月 渡辺理事が「春季年会を弾みに化学のさらなる発展を志向できるようにしたい」と語る	7.24 (水)	化学工業日報
21 本学や東京大学、トヨタ自動車株式会社、東レ株式会社などが量産向け炭素繊維複合材を共同開発する産学官連携プロジェクトが始動	7.24 (水)	日刊工業
22 第11回全日本学生フォーミュラ大会：本学のフォーミュラチーム FEM が10年連続で参戦	7.24 (水)	中日 (朝刊)
23 竹田美和本学名誉教授が所長を務めるあいちシンクロトロン光センターが成果の公開を条件に無償で同センターの計測装置を利用できる制度を創設し利用者を募集	7.24 (水)	日刊工業
24 ビジネスリーダー：外交問題が置き去りにされた不思議な選挙 元駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生	7.24 (水)	日経 (夕刊)
25 伊丹健一郎トランスフォーメティブ生命分子研究所教授などは芳香族分子とアルケン分子をつなげる新しいカップリング技術を確立し、独自のニッケル触媒が可能となり関東化学株式会社が新触媒を8月末に発売予定	7.24 (水) 8. 1 (木)	化学工業日報 中日 (朝刊)
26 現代日本誤百科 (837)：「もうすぐで」卒業だ 町田 健文学研究科教授	7.25 (木)	中日 (朝刊)
27 第34回 spcafé「植物ミトコンドリア DNA のダイナミクス」開催：29日	7.25 (木)	中日 (朝刊)
28 親子サマーセミナー in 名古屋大学2013開催：8月12日 渡辺理事が開校挨拶	7.25 (木) 7.26 (金)	日経 (夕刊) 日経 (朝刊)
29 齋藤 晃エコトピア科学研究所准教授と埼玉工業大学は電子ビーム中に生成した2つの渦がビームの中心のまわりを公転運動することを突き止めた	7.26 (金)	科学新聞
30 平成25年度市民公開講演会「科学・技術と現代社会」開催：8月1日 益川敏英本学特別教授が講演	7.26 (金)	中日 (朝刊)
31 中部科学技術センター2013年度学術奨励研究助成事業助成先：山崎 順エコトピア科学研究所助教	7.26 (金)	中日 (朝刊)
32 本学はリクルート進学総研がまとめた高校生が志願したい大学で5年連続東海地区1位となる	7.26 (金)	朝日 (朝刊)
33 韓国科学技術院総長姜城模氏と在名古屋韓国総領事館総領事李均東氏が益川敏英本学特別教授を表敬し「名古屋は経済性の高い地域。名大との交流を深めたい」と語る	7.27 (土)	中日 (朝刊)
34 東海学生マンドリン連盟合同演奏会開催：8月10日 本学ギターマンドリンクラブが出演	7.27 (土)	中日 (朝刊)
35 診断から治療まで進化し続ける内視鏡 後藤秀実医学系研究科教授	7.27 (土)	中日 (朝刊)
36 世界口腔保健学術大会記念第19回口腔保健シンポジウム「口からはじまる健康長寿－口とカラダから考える健康管理－」開催：6日 内藤真理子医学系研究科准教授が講演	7.27 (土)	読売
37 全国国公立・有名私大相談会2013開催：8月3日	7.27 (土)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年7月16日～8月15日]

記事	月日	新聞等名
38 宇宙を追う 生命の起源へ 名大の挑戦 福井康雄理学研究科教授の研究が取り上げられる	7.28 (日)	朝日 (朝刊)
39 座談会 知っていますか？肝炎のこと 後藤秀実医学系研究科教授、石上雅敏医学部附属病院助教	7.28 (日)	中日 (朝刊)
40 現代日本誤百科 (838)：「失点を許す」町田 健文学研究科教授	7.29 (月)	中日 (朝刊)
41 松尾拓哉遺伝子実験施設助教と石浦正寛本学名誉教授などのグループは緑藻の体内時計の分子メカニズムを解明	7.30 (火)	中日 (朝刊)
42 国境越えて「PM2.5」飛来 松見 豊太陽地球環境研究所教授が解説	7.30 (火)	日刊工業
43 いまドキッ！大学生：遊んでばかりじゃられない 中井俊樹高等教育研究センター准教授は「浮かれた学生が多かったバブル期はもちろん、10年前と比べても真面目に勉強する学生が増えた」と語る	7.30 (火)	中日 (朝刊)
44 現代日本誤百科 (839)：「見ていただかれた」でしょうか 町田 健文学研究科教授	7.31 (水)	中日 (朝刊)
45 第36回名大カフェ “Science, and Me”「21世紀を拓くナノ炭素の秘密 -フラーレン、カーボンナノチューブ、グラフェン-」開催：8月15日 篠原久典理学研究科教授が講演	7.31 (水)	中日 (朝刊)
46 小島勢二医学系研究科教授と村松秀城医学部附属病院助教などのグループは若年性骨髄単球形白血病の原因となる血液がんの骨髄異型性症候群を白血病に進行させる遺伝子異常を突き止めた	8. 1 (木)	毎日 (朝刊)
47 辛言直言：自由で多様な研究 守れ 小林 誠本学特別教授	8. 1 (木)	日経 (朝刊)
48 本学はプラズマ医療科学国際イノベーションセンターを新設	8. 1 (木)	毎日 (朝刊) 他3社
	8. 2 (金)	日刊工業
49 大学変貌：試行錯誤の4学期制 本学が学期制について4学期制を含め検討中と取り上げられる	8. 2 (金)	朝日 (朝刊)
50 第2回市民公開講座開催：4日「子宮頸がんの予防について」水野美香医学部附属病院講師が講演	8. 3 (土)	中日 (朝刊)
51 手をつなぐネットワーク集会－ハンディをもつ多胎児とその親の会－2013夏開催：10日 大幸キャンパスで行われる	8. 3 (土)	朝日 (朝刊)
52 名古屋大学ラジオ公開講座：第5回「健康、疾患の基礎としての免疫系」磯部健一医学系研究科教授	8. 4 (日)	中日 (朝刊)
53 病院の実力：血液がん 医学部附属病院の実績が取り上げられる	8. 4 (日)	読売
54 医学部附属病院で実施した16歳の小児がん患者に対する余命告知について高橋義行医学系研究科准教授は「本人の希望を尊重することが本人にも家族にも納得できる終末期につながる」と語る	8. 5 (月)	中日 (朝刊)
55 現代日本誤百科 (841)：「腐れにくい」町田 健文学研究科教授	8. 5 (月)	中日 (朝刊)
56 名古屋シェイクアウト2013事前説明会開催：6日 福和伸夫減災連携研究センター教授が講演	8. 5 (月)	中日 (朝刊)
57 現代日本誤百科 (842)：「ログインできない事象」が発生 町田 健文学研究科教授	8. 6 (火)	中日 (朝刊)
58 第27回博物館企画展「本物？作り物？ロウ細工？ 教育標本ムラージュ」開催：6日～10月19日	8. 6 (火)	中日 (朝刊)
59 医人伝：社会保険中京病院眼科主任部長市川一夫氏本学卒業生	8. 6 (火)	中日 (朝刊)
60 本学は文部科学省の平成25年度「研究大学強化促進事業」の支援対象機関に採択され、支援対象となった22機関のうちトップ4に選ばれた	8. 7 (水)	日経 (朝刊) 他2社
61 ナビゲーター：石川孝司工学研究科教授は「炭素繊維強化プラスチック (CFRP) 部材は自動車分野でも爆発的に広がる」と語る	8. 7 (水)	日刊工業
62 現代日本誤百科 (843)：「より一層」町田 健文学研究科教授	8. 7 (水)	中日 (朝刊)
63 あいち九条の会学習交流会開催：10日 本 秀紀法学研究科教授が講演	8. 7 (水)	中日 (朝刊)
64 紙つづて：終戦のエンペラー 井口治夫環境学研究科教授の研究が取り上げられる	8. 7 (水)	中日 (夕刊)
65 現代日本誤百科 (844)：「局が俳優の出演を見合わせた」町田 健文学研究科教授	8. 8 (木)	中日 (朝刊)
66 名古屋スペースキャンプ2013 NSC-2開催：7日	8. 8 (木)	中日 (朝刊)
67 本学と愛知県立大学などの研究グループは人間の生活リズムに適合したLED スマート照明システムを開発	8. 9 (金)	中日 (朝刊)
68 ひらく日本の大学：朝日新聞・河合塾共同調査 本学はグローバル30の取り組みについて「これまでの取り組みを続けるためには学内予算だけでは足りない。新たに競争的資金を見つけて応募しなければ」と語る	8. 9 (金)	朝日 (朝刊)
69 あいちトリエンナーレ2013オープンアーキテクチャー連載企画1「名大でアートを歩く」開催：20日	8. 9 (金)	中日 (朝刊)
70 平成25年度 NEDO 特別講座「環境考慮型モビリティ技術経営特別講座」受講者募集	8. 9 (金)	中日 (朝刊)
71 ひらく日本の大学：朝日新聞・河合塾共同調査 本学が入学時に TOEFL を全員に受験させ、学生の英語力を把握し底上げを図っている取り組みが取り上げられる	8.10 (土)	朝日 (朝刊)
72 石原一彰工学研究科教授はカルボン酸アミドを化学合成するのにボロン酸が高性能な触媒として利用できることを突き止めた	8.11 (日)	中日 (朝刊)
73 福和伸夫減災連携研究センター教授は南海トラフの巨大地震の際に国が提唱する避難者トリアージについて「できるだけ避難者選別という厳しい判断をせずにすむよう努力を重ねる必要がある」と語る	8.11 (日)	朝日 (朝刊)
74 2013年度日本数学コンクール開催：10日 宇澤 達多元数理科学研究科教授は「若い人たちが身近な世界に広がる数学の考え方に触れ、将来を支える人材に育ててもらいたい」と語る	8.11 (日)	中日 (朝刊)
75 第8回日本安全学教育研究会開催：16～18日 ベンチャービジネスラボラトリー3階ベンチャーホールにて行われる	8.11 (日)	中日 (朝刊)
76 第53回愛知県合唱コンクール大会：大学職場一般部門 大学ユース合唱の部 本学混声合唱団コール・グランツェが中部大会に進出	8.11 (日)	朝日 (朝刊)
77 明日がある いじめに悩む君へー：学校以外での出会い探そう 作家宮本延春氏本学卒業生	8.11 (日)	中日 (朝刊)
78 大野雄高工学研究科准教授はフィンランドのアールト大学と共同で世界初となるカーボンナノチューブのみで集積回路を実現	8.13 (火)	日刊工業

記事	月日	新聞等名
79 齋藤弥八工学研究科教授と安坂幸師同講師は炭素原子からなる皮が2～3重になっている中空炭素カプセルを開発	8.13 (火)	日経 (朝刊)
80 現代日本読百科 (845)：友人から「相談事をされた」町田 健文学研究科教授	8.13 (火)	中日 (朝刊)
81 小島史歩さん教育学部附属高等学校3年生が「2013あいち・平和のための戦争展」に出演した韓国・光州市から日本にホームステイをしている高校生に質問	8.13 (火)	朝日 (朝刊)
82 現代日本読百科 (846)：教師としての「未熟さの証明」町田 健文学研究科教授	8.14 (水)	中日 (朝刊)
83 時のおもり：科学者の不正行為 池内 了本学名誉教授	8.14 (水)	中日 (朝刊)
84 2013「防災の日」NIKKEI シンポジウムー東日本震災から2年半の教訓を考えるー開催：24日 福和伸夫減災連携研究センター教授と廣井 悠同准教授が講演	8.14 (水)	日経 (夕刊)
	8.15 (木)	日経 (朝刊)
85 2013年度打ち上げ予定の主な超小型衛星で本学が開発した ChubuSat-1が取り上げられる	8.15 (木)	日刊工業
86 第66回愛知県高等学校野球選手権大会名古屋地区予選：1次予選 教育学部附属高等学校が昭和高等学校に1-10で敗れる	8.15 (木)	読売

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容	
8月6日(火)～10月19日(土) 場 所：博物館2階展示室、 野外観察園セミナーハウス 時 間：10:00～16:00 休 館 日：日・月曜日 (博物館)、 土・日・祝日 (セミナーハウス) 入 場 料：無料	第27回博物館企画展 「本物？作り物？ロウ細工？ 教育標本ムラージュ」 [関連講演会] 場 所：博物館3階講義室 時 間：14:00～15:30 対 象：一般 参 加 費：無料 9月21日(土) 講演題目：「よみがえったムラージュ 名古屋大学の宝」 講 演 者：小林身哉氏 (金城学院大学教授) 9月26日(木) 講演題目：「新しくわかってきた皮膚疾患発生のメカニズムー皮膚バリア障害など」 講 演 者：秋山真志 (医学系研究科教授) 9月28日(土) 講演題目：「三河発シイタケ栽培 明治初期の近代菌類学パイオニア：田中長嶺」 講 演 者：中條長昭氏 (特定非営利活動法人田中長嶺業績顕彰会理事長) 10月12日(土) 講演題目：「第四高等学校旧蔵『キノコ・ムラージュ標本』の再発見とその後の展開」 講 演 者：古畑 徹氏 (金沢大学教授)	
[問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767		
8月20日(火)～10月15日(火) (期間内の火・木曜日) 場 所：経済学部1階第1、第2講義室 時 間：18:00～19:30 定 員：200名 対 象：一般 参 加 費：9,200円 (全15回)	平成25年度名古屋大学公開講座 テ ー マ：「絆：つなぐ、つながるを考える」	
[問い合わせ先] 研究協力部社会連携課 052-789-5969		
9月20日(金) 場 所：環境総合館1階レクチャーホール 時 間：18:00～19:30 定 員：120名 対 象：一般 参 加 費：無料	第93回防災アカデミー 講演題目：「風評被害のメカニズムとその対策」 講 演 者：関谷直也氏 (東洋大学准教授) 内 容：社会心理学関連	
[問い合わせ先] 減災連携研究センター 052-789-3468		

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月20日(金)

場 所: ES 総合館 1 階 ES ホール
時 間: 8:45~19:00
定 員: 200名
対 象: 一般
参 加 費: 無料

博士課程教育リーディングプログラム
「グリーン自然科学国際教育研究プログラム」
企業研究者を志すための合成化学セミナー

内 容: 企業研究者を志す有機合成化学分野の大学院生が
企業の先端研究を通し博士研究者に求められるものを
模索・討論する



[問い合わせ先]

博士課程教育リーディングプログラム
「グリーン自然科学国際教育研究プログラム」
suzuki.daisuke@e.mbox.nagoya-u.ac.jp

9月22日(日)

場 所: 愛知芸術文化センター12階
アートスペースA (名古屋市東区)
時 間: 14:00~19:00
定 員: 180名
対 象: 一般
参 加 費: 無料

グローバル COE プログラム
「地球学から基礎・臨床環境学への展開」
公開シンポジウム

テ ー マ: 「環境・文化芸術まちづくりへの処方箋
—低炭素・アート・豊かなくらし—」
講演題目: 「都市化の診断と治療—経済の時代から環境・文化芸術へ—」
講 演 者: 林 良嗣 (環境学研究科教授)
内 容: 基調講演、取組事例報告、総論討論会



[問い合わせ先]

環境学研究科
助教 吉田友紀子 052-789-3431

9月23日(月)

場 所: 理学南館 1 階坂田・平田ホール、
他
時 間: 15:00~17:00
対 象: 一般
参 加 費: 無料

秋の名古屋大学オープンレクチャー2013

講演題目: 「夢の技術をかええる超伝導のはなし」
講 演 者: 生田博志 (工学研究科教授)
講演題目: 「大発見・大発明に大切なセレンディピティーのはなし」
講 演 者: 石原一彰 (工学研究科教授)
講演題目: 「日本語のコミュニケーションと文末表現のはなし」
講 演 者: 大島義和 (国際開発研究科准教授)
講演題目: 「再生医療と薬のはなし」
講 演 者: 加藤竜司 (創薬科学研究科准教授)
講演題目: 「動物と植物の生殖のはなし」
講 演 者: 澤田 均 (理学研究科附属臨海実験所教授)
講演題目: 「未来を拓く新機能性材料の開発のはなし」
講 演 者: 澤 博 (工学研究科教授)
講演題目: 「最近の太陽黒点と宇宙天気のはなし」
講 演 者: 徳丸宗利 (太陽地球環境研究所教授)



[問い合わせ先]

リサーチ・アドミニストレーション室
研究員 戸次真一郎 052-747-6791

9月23日(月)

場 所: 愛知県芸術劇場地下2階
中リハーサル室 (名古屋市東区)
時 間: 18:00~
対 象: 一般
参 加 費: 無料

愛知県立芸術大学・名古屋大学の学生による
複合型コンサート
KAIDAN 現代に甦る怪談

内 容: 古来より伝えられている怪談話をもとに作曲・演出する
コンサート



[問い合わせ先]

kaidankikaku@gmail.com

9月24日(火)、25日(水)

場 所: 研究所共同館
(地球水循環研究センター内)
時 間: 13:00~16:30
定 員: 30名
対 象: 大学院生、若手研究者
参 加 費: 無料

第7回「地球気候系の診断に関わる
バーチャルラボラトリーの形成」講習会

テ ー マ: 「メソ気象現象の解析」
講演題目: 「計算機を用いたデータ処理と描画」、
「解析結果にもとづくグループディスカッション」、
「解析結果のプレゼンテーション」、
「メソ気象現象の解析手法と実践についての講義」
講 演 者: 上田 博 (地球水循環研究センター教授)、坪木和久 (同教授)

[問い合わせ先]

地球水循環研究センター 052-789-3497

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月24日(火)

場 所：情報基盤センター4階演習室
時 間：13:00~14:30
定 員：40名
対 象：一般
参 加 費：無料

平成25年度第6回情報連携統括本部公開講演会・研究会

講演題目：「セキュリティ・インテリジェンスによる最新のサイバー攻撃対応」
講 演 者：松田 剛氏（日本アイ・ビー・エム株式会社シニアコンサルタント）

[問い合わせ先]

情報推進部情報推進課 052-789-4368

9月25日(水)~1月31日(金)

場 所：附属図書館医学部分館
2階入口ホール
時 間：9:00~20:00（平日）
（9月25~27日、30日、1月6、
7日は9:00~17:00）、
13:00~17:00（土曜日）
休 館 日：日・祝日、9月28日、
12月28日~1月4日
入 場 料：無料

附属図書館医学部分館第5回ミニ展示会

「愛知医学校長 後藤新平

ー「大風呂敷」と呼ばれた男の名古屋時代ー

内 容：壮大な発想から「大風呂敷」と呼ばれた政治家後藤新平の足跡を愛知医学校時代を中心にたどる。史料や卒業証書などの新収史料、貴重な文献、写真、絵葉書、生涯を描いたDVDを展示。



[問い合わせ先]

附属図書館医学部分館 052-744-2505

9月27日(金)

場 所：ジュンク堂書店ロフト名古屋店
7階ブックサロン(名古屋市中区)
時 間：18:30~20:00
定 員：30名
対 象：中学生以上、一般
参 加 費：無料

第37回名大カフェ “Science, and Me”

講演題目：“もの”を分ける 新たな技術をめざして
講 演 者：岡本行広（革新ナノバイオデバイス研究センター特任講師）



[問い合わせ先]

リサーチ・アドミニストレーション室
研究員 戸次真一郎 052-747-6791

9月29日(日)

場 所：中区役所ホール（名古屋市中区）
時 間：13:30~15:30
定 員：500名
対 象：一般
参 加 費：無料

第8回名大病院市民公開講座

講演題目：「骨の健康ーさらに進む治療薬ー」
講 演 者：石黒直樹（医学部附属病院院長）
講演題目：「くすりの効果の調べ方」
講 演 者：平川晃弘（医学部附属病院講師）



[問い合わせ先]

医学部附属病院
先端医療・臨床研究支援センター
052-744-1956

名大トピックス No.244 平成25年9月17日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

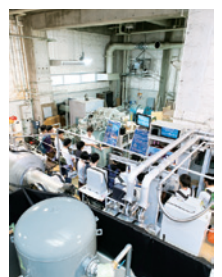
TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

オープンキャンパスで
施設見学する様子
(平成25年8月7日)



137 豊田講堂完成式 — 名大統一のシンボル誕生 —

1960(昭和35)年5月9日、トヨタ自動車工業株式会社(現在のトヨタ自動車株式会社)の建設寄附による豊田講堂の完成式典が盛大に挙行されました。大学文書資料室には、この式典に関する文書ファイルが保存され、その詳細を知ることができます。

式典の具体的な準備がはじまったのは、躯体工事が1960年3月に終わった翌4月に入ってからでした。トヨタ側が原案を作成し、それを名古屋大学側と協議しながら進められていったようです。式典の運營業務も、トヨタは取締役の1人、名大は事務局長が責任者となり、それぞれ約50名ずつの職員が動員されました。予算は、諸経費を含めて267万2千円とされています。名大の学部生の授業料が年額9千円の時代です。また、4月25日と30日の2回にわたって式典のリハーサルがおこなわれました。

そして、正式名称「名古屋大学豊田講堂完成式」は、ト

ヨタ及び名大の関係者、文部省及び大学関係者、県内から選出された国会議員、県内の官公署関係者や自治体の行政関係者、名古屋財界関係者、報道関係者などの招待者335名の出席の下、午前10時開始、午前11時20分終了を予定として挙行されました。

式辞においてトヨタの石田退三社長は、豊田佐吉や豊田喜一郎ら豊田家の先覚者たちの精神が込められた豊田講堂が、教育の振興、科学の発展の一助となることを切望してやまない、と語りました。また、名大の松坂佐一総長は、大学のシンボルともいべき講堂の完成によって、真に名古屋大学に中心ができたようだ、とあいさつしました。

そしてこの翌月、6月3日から6日にかけて、これからの名大の中心となるべき豊田講堂を主会場として、キャンパスが各地に分散する各学部の文化祭と体育祭を統一した、第1回名大祭が開催されたのでした。



3	2	5
1	4	

- 1 完成式当日の豊田講堂 (名古屋タイムズアーカイブス委員会提供)。
- 2 完成式全景 (中日新聞社提供)。竣工日はこの5月9日とされたが、すでにそれに先立ち、3月には卒業式、4月には入学式がここでおこなわれていた。
- 3 舞台上は、向かって左から名古屋商工会議所会頭、名古屋市長、愛知県知事、文部大臣代理者、勝沼精蔵前総長(檀上)、石田社長、松坂総長、須川義弘建設委員、竹中工務店社長、榎文彦氏(設計者)が上がった。



- 4 完成式終了後の立食パーティーで談笑する勝沼前総長。建設の決定や着工は勝沼総長時代のことであった。
- 5 完成式の際に、記念品として出席者等に贈呈された、豊田講堂をデザインした木彫りのブックエンド(大学文書資料室所蔵)。トヨタ側が準備を担当し、松坂屋に800個を発注した。